

男性の育児休業②

前回に続いて、下石町在住の男性の育児休業に関するインタビューをご紹介します。

Q 育児休業中に経験して楽しかったことや、うれしかったことは何ですか？

A 子どもに何かしてあげられないかと考え、陶器の産地である地元で離乳食用食器を作ることにしました。そうやって子どものことを考えたり、実際に物を作ったりすることが楽しかったです。

また、食器作りの参考にしようとして陶器祭りへ行ったり窯元巡りをしたりする中で、身近であるが故に見落としていた地元の面白さを再発見することができました。

Q 苦労したことは何ですか？

A 苦労して作った離乳食を食べてくれなかった時はがっかりしました。また、ミルクの準備中に泣かれると、「やっぱり母親の方がいいのかな」と感じることもありました。

Q 奥さまから一言お願いします。

妻 家事全般を一生懸命やってもらいました。夫の育児休業が終わった後は、家事と仕事を両立させるのが大変でしたが、今でも夫が家事を頑張る習慣が続いているので、一緒に頑張っています。いろいろなイベントや教室に両親で参加できて、楽しかったです。

Q 育児休業の取得を考えている人へアドバイスを！

A 出産直後や母親が実家から戻ってきた時、父親も1〜2カ月程度の育児休業を取得すると、母子への負担がかなり減らせると思います。

家事や育児の苦労が分かるため、仕事に復帰してからもお互いに協力し合うことで、家庭円満な日々を過ごすことができますよ。



健康ほっとLine

—市立総合病院の医師が健康に関する情報をお届けします—

小児科のご紹介

平成3年1月に土岐市立総合病院に赴任して、24回目の正月を迎えました。当時は3人いた小児科医も平成23年4月からは1人になりました。一般小児科を診療する医師の補充はかないませんでしたが、平成24年4月から、今まで対応できなかった「心の相談外来」を毎週火曜日に完全予約制で元県立多治見病院小児科部長の中野先生にお願いしています。

20数年前に比べると、土岐市瑞浪市での病院常勤の小児科医は4分の1に減りました。しかし、主たる診療科ではないが小児科を標榜しているクリニックや、主に小児科を診療科とするクリニックが整ったことにより、平日の外来診療は感染症の流行期でもさほど混み合うことはありません。

お薬手帳が活用されることにより処方方の透明化が進み、大体似通った処方薬でこの地域の小児医療は行われています。最後はさじ加減で、良くならない時の対処法に絞られますので、現状を維持しつつ後継者の育成に力を入れています。

入院については、治療法の改

小児科部長

元吉 史昭

善や予防接種の普及、治療薬の進歩により、入院で治療しなければならぬ事態は以前と比べると減ったと感じています。多治見市には専門性の高い疾患、一人では手に余る重症な病態の治療を依頼できる県立多治見病院小児科があり、当院は軽症、中等症用の入院病床を確保することで地域の小児医療を支えています。

救急医療についても、できる範囲で、土・日曜日、年末・年始の二次救急当番日診療の一翼を担い続けています。小児の診療範囲は幅広いので、他科の境界領域に重複してくる場合は連携して対応しています。また充実したりハビリ部門の協力により小児の言語療法、作業療法、理学療法にも対応しています。学校検診（心電図、内科検診、腎臓、アレルギー管理票、結核）などの要精検者の診断については当院で経過観察できるものは追跡検査し、専門性の高い診断や治療、検査の必要な方には、しかるべき施設を紹介するなど適切な対応に努めています。これからもよろしく願います。